

# 村の雄鶏が時をつくれば

——キリスト教会の塔を飾るもの・続——

吉 田 正 彦

教会の塔の上の黄金色の雄鶏がいつ導入されたか、私は知らない。本来は単なる「風見」ではなかったであろう。<sup>(1)</sup>

教会の尖塔の風見の鶏について、ヤーク・グリムは『ドイツ神話学』において私たちに二つの重要な問を提起している。ひとつはそれが導入された時期であり、他のひとつは、その表徴する意味である。前者についてグリムは北フランスのベネディクト僧ギルベールの自伝から引用した「塔の上の雄鶏」<sup>(2)</sup>を傍証とし、この風習がフランスでは十二世紀初頭に、南ドイツではその二世紀前に行われていた、とする。この間については私達は立証すべき多くの材料を持たない。ただ、これに関する最も古い記録は目下のところ九世紀に遡ることができる。即ち北イタリア、ブレシアの司教ラムベルトゥスがブロンズの雄鶏を鑄造させた、<sup>(2)</sup>という。八二〇年のことであ

る。また九六五年には、シャロンのサン・ピエール大修道院の塔の鶏が破損した、と記され、この頃にはある程度は普及していたことをうかがわせる。尚ブレシアの場合、司教は雄鶏に銘を付して自分の教会の尖塔に置かせたとされる。しかしその内容については詳ではない。<sup>(3)</sup>とところで旗や十字架、あるいは雄鶏の据えられる「塔」はいつ頃から建てられるようになったのだろうか。少くとも古代の神殿の傍に塔は作られなかった。また初期キリスト教時代にイタリアのラヴェンナに建立された、ウルスを初めとする幾つかのバシリカについても、塔の増設が行われるのは数百年後の十世紀であり、教会建築に塔が付されるのはフランク||カロリング王朝に始まる

と推測されている<sup>(4)</sup>。もちろんキリスト教が塔に何の興味も示さなかったわけでは決してない。神の高みに到達せんとする人間の高慢を描く、否定的な意味合を帯びるパベルの塔は言う迄もなく、聖母を象徴化する象牙の、あるいはダヴィデの、肯定される塔等<sup>(5)</sup>、特に旧約聖書においては多様に象徴性を持たせた塔が登場する。また、古代キリスト教徒の墓石に刻まれた永遠の生命を表す灯楼、四世紀以降十数世紀にわたり用いられた塔型典礼用器、あるいはカタコムベに描かれたフレスコ画等<sup>(6)</sup>、聖書または外典などの言及を形象化、図像化した塔もあるのだが、教会建築として塔が規則的に登場するのは西洋では漸く八、九世紀だ、というわけである<sup>(7)</sup>。

古来教会は天の町、神の国の似姿として建設された。

それは教会の建物にも、設計の理念としても、また開基の儀式においても、様々の形で具現される。天の町の市壁で見張りをするという天使を扶壁上<sup>(8)</sup>に置いた内陣、十字架差部の塔や多角形型アプスの側面上に並べられて家屋の集合体としての町を表わす切妻形裝飾等<sup>(8)</sup>。しかも、教会開基に当って、フランク及びミラノの慣習により行なわれた儀式では、古代ローマの都市建設の式典に則り、新教会の保護の聖者に向い、彼らのために建てられた「町」に、聖遺物の形を採って住居してくれるよう祈

願する。中世初期においても、教会建築物、特にその平面図は、古代の都市の、平面幾何学的秩序を理想としたのである。しかし町に関するイメージは変らざるを得ない。都市が成立する以前のアルプス以北ではそのような理想とは別の事情が作用したと思われる。そこでは多くの塔を持ち防備を堅固にした城の建物群が、凝縮された「町」のようにひとつの集合体として形成される。教会の塔がそれとほぼ時を同じくして次々と出現することを考えるなら、ここには古代の理想像とは異った、新たな「町」の概念が誕生し、立体幾何学的構造を生み出したものと思われる<sup>(9)</sup>。因に聖地エルサレムも、提喻法によって、ひとつの塔により描き出されるのである。

教会に塔を付設させたもうひとつの理由に鐘の大型化が考えられる。中国で生れたといわれる鐘は幾つかの経路でヨーロッパへもたらされる。鑄造技術に勝れたケルト人により、西南アジアを経て地中海圏、ガリア、イギリス諸島へ。一方でロシアから北欧、スコットランド、アイルランドへ。この北経路での伝達過程において大型の鐘が誕生したといわれる。本来奴隸の起床や食事の合図、風呂、市の開始等私的、公的に用いられたのは小型の鐘であった。また鈴、あるいは小型の鐘は俗信的、または宗教的に古くから数多くの民族により、悪霊を防ぎ

破う目的で用いられた。死者の埋葬時や副葬品として。祭司が聖所に入る際に「死を招くことがないため」<sup>(11)</sup>にその服に着けた鈴。牛の首につける鈴は、この動物が元来犠牲動物であったことを窺わせる<sup>(12)</sup>。これとは別にわが国の神社では、神の招来を目的に用いられるという。

鐘は初期キリスト教のカタコムベ等にも無数に見出される<sup>(13)</sup>という。しかしヨーロッパにおいて鐘に関する記録が残されるのは六世紀になる。即ちオリエントの異教の修道院で礼拝及び院内部での集会の合図として用いられ、鐘の利用法がヨーロッパ北部を経てアイルランド、ガリアへ、更に北アフリカからこの頃にイタリアへ伝わった、という。キリスト教会は元来異教の祭祀で用いられたために鐘を批判的に見ていた<sup>(14)</sup>。しかし、「七世紀初頭には教皇サビニアヌスが鐘を鳴らすことを命じ」<sup>(15)</sup>、当初はベネディクト修道院に鐘の鑄造許可が与えられる。八世紀のことである。同じ頃教会で用いられる鐘に聖性を持たせるべく聖別の儀式も行われるようになった。だが鑄造技術の向上により大型化が可能になり、また都市の形成が進むに従い、十二世紀以降鑄造の権利も世俗の職人の手に移っていく<sup>(16)</sup>。鐘は教会内のみならず、都市に住む人々をも一時計化することにより管理することとなる。

キリスト教はこうして、遅くとも七世紀初めには鐘を再発見する。それは「音」という特性をそこに改めて認め、象徴の意味を持たせ、利用することであった<sup>(17)</sup>。鐘が修道院内ばかりでなく、一般の教会でも用いられるようになるには、大きな理由があった。大型化が可能になった、という事実である。このことは内部のみでの合図に用いられるだけではなく、教会外部、即ち人々をミサへと招き寄せることを可能にする。それは教会建築上、建物の一定の場所に吊された鐘が、可能な限り遠く迄音を響き渡らせるために、建物外の高所に据えられることを示唆する。それによって鐘は最も威力を発揮し、教会の象徴となり得るからである。こうして塔の建設が促されたと考えられるのである。鐘の大型化に伴い、塔は先ず受洗礼拝堂として<sup>(18)</sup>、教会の傍に高く聳え立つ。

ところで人々をミサへと誘う鐘の音はまた異教の残滓を未だ色濃く保ち続ける初期中世の人々にとっては神の声、彼らをキリスト教信仰へと促し駆り立てる警告の声であった。そのような象徴性を帯びるものと人々には思われたのである<sup>(19)</sup>。この象徴性はそのまま、鐘を吊す塔にも賦与される。そればかりではなく、中世の人々にとって塔は教会の象徴、即ちそこにおいて神の国について語り、彼らを見守る神の、父としての慈しみを伝える説教

者の象徴でもあったのである。<sup>(20)</sup>

以上瞥見したように、カール王朝期及びその前後における都市の理想像の変化、鐘の大型化などを要因とし、塔の建設が促進されたと推測されるが、それはまた、先に述べたブレシアの教会の塔に雄鶏の置かれた時期と図らずもほぼ重り合う。では如何なる意味をもって雄鶏は教会と関り合い、その尖塔にはばたくこととなったのであろうか。

鶏のヨーロッパでの図像上の歴史は、紀元前六世紀前半にギリシアの壺絵に装飾として、また闘鶏の場面が描かれることに始まる。文献上の記録もほぼ同時期とされる。<sup>(21)</sup> インドからこれをギリシアに伝えた国の名をとって、メディア、あるいはベルシアの鳥と命名され、同時に地中海圏に普及する。しかしゲルマン諸部族に関しては、鶏が何時頃、どのような経路で伝わったかは不明である。それは、彼等がフィンランド人と隣接して住む以前、ゲルマン神話の生成期である、といわれる。その際鶏は、時を告げ、夜明を知らせることにより、夜の闇に潜む諸々の霊を追い払うものとして神々や地下の神話の世界に組み込まれた、と。<sup>(22)</sup> ゲルマンの人々は——神話のみならず、語源等から推察しても——雄鶏の時を作る鳴声に関心を示したのであった。<sup>(23)</sup>

ところで「悪魔縛り」と譚名されるベルシア王タフムーラスが夜明を告げるようにと導入して以来、<sup>(24)</sup> 鶏は光の神のシンボルとして神聖な動物とされる。ゾロアスター教典は、開祖の問に応じて主神アフラ・マズダーが鶏を義神ストラオシャの従臣とし、

その鳥は力強い黎明に向って声を張り上げて言う、  
「起きよ、おお人間よ、いとも望ましき公正を誉め称えよ、悪霊共を貶めよ……」、と

答えたことを記し、また

鶏は犬と力を協せて悪霊や魔法使いに対抗するように創られている<sup>(25)</sup>

とも述べられる。即ち鶏は時を作ることにより、単に夜明を告げるばかりではなく、夜の闇に跋扈する悪霊を追い払い、アポトロベックな役割をも担っているのである。夜明との関連から、雄鶏は太陽と結びつけられ、インドでは早くから太陽神及び火神に犠牲として捧げられた。<sup>(26)</sup> 雄鶏にまつわるこれらの解釈は、鶏の渡来と必ずしも時期的には一致しない迄も、ヨーロッパにも伝わる。たとえばギリシア神話はこれをヘーリオス及びアポロンに付属させ、また密通する愛人たちに朝の到来を告げるアレクトリユオーンの、雄鶏への変身譚を伝えていく。一方、アポトロベックな役割を負うものとして

は、現今では夜明を告げる雄鶏の声に悪魔の退散する昔話、伝説として主に残されるが、本来は多様に形を変えて諸民族に俗信として伝えられた、と考えられる。ペルシアの影響を受けたアルメニアの伝承によると、夜、人々の寝静まるのを待って天に登った保護の天使が夜明に戻って来るのを見て、雄鶏は歌い、災厄の悪霊を追い払う。ドイツ、あるいはリトウニアでは新たな住居に移る際に先ず雄鶏を入れ、鳴声によって悪霊の有無を確かめた。またそれ故に飼鶏を食用にすることが禁じられた、という。逆に時ならぬ鶏鳴は、後世のトリマルキオを狼狽させたように、災厄の迫っていることを意味する、と考えられた。ギリシアにおいては、雄鶏の声を恐れてライオンが逃げる話は伝えられるものの、アポトロペイックな側面が認められるのはヘレニズム期になってからの記録が残されるのみである。出産時の護符としては早くも前六世紀に登場し、またアポロンとアルテミスの母親レトーはこの鳥を分娩中の女性を助けるものとした、とも言われるところから、俗信的には早くからあったのかもしれないが、あるいは鶏の旺盛な繁殖力、当時盛であった闘鶏に因む生命力の強さに、生れ出る子供の健康を託そうとしたのかもしれない。付記するなら、雄鶏のこれら二つの解釈がペルシアからユダヤ教に伝わると、濃

厚な宗教的色調を帯びてくる。

恩寵の刻(真夜中頃)、神は楽園を訪い、敬虔なる者の魂と語りたもう。するとその聖き所より火が生じ、雄鶏の翼に触れる。と、たちまち雄鶏は神の頌歌をうたい始め、それと共に人々に、主を誉め称え、主のために勤行を始めよ、と呼び掛ける。雄鶏はここでは、人々を信仰へと誘うものとのイメージを賦与されるのである。

紀元前六世紀にペルシアから鶏が伝来した当初、ギリシア人が関心を示したのは闘鶏であった、とされる。因に壺絵のみならず文学においても、アイスキュロスは雄鶏の血気盛な性情をもって、争い合う市民の譬えとする。その由来譚によると、アテネのテミストクレスがペルシア軍との戦に向う途中鶏の争うのを見掛け、その闘争心、攻撃欲を手本に勇敢に闘うよう兵を鼓舞した。戦に勝利を収めた後、アテネでは闘鶏が規則的に行われるようになった、という。彼らにとり鶏は戦闘精神の象徴となつたのであった。一方ローマ軍が遠征に伴つた雄鶏は、戦の吉凶を占う神託の動物であった。その食欲や仕草により開戦の時期を占い、戦果の有無を知ることになる。だが鶏による占は戦時のみならず、ローマ人にとつては一般的な利用法であつたと思われる。妊娠中のリウ

イアは、自らの掌で温めた卵から雄鶏が孵化したことから、後のティベリウス帝の誕生を予知するし、また巡回裁判中のウィテリウスの肩から頭に止った鶏は、彼がやがて「鶏の嘴」と諱名される男により庄殺される予兆となった。<sup>(35)</sup>

旺盛な闘争力、予知力等のみならず、古代ギリシア、ローマの人々は、後世の認める鶏の特性を他にもかなり適切に把えていた。再度アイスキュロスは雄鶏の誇り高い様について記し、<sup>(36)</sup> アリストファネスはそれを、かつては「ペルシアの王」であったと述べる。<sup>(37)</sup> 更に、多くの雌鶏に囲まれた雄鶏の並外れた精力家としてのイメージ等。勿論食用としての飼育も行われる。<sup>(38)</sup> 神々への犠牲動物としては、手軽に調達し得るにもかかわらず特にローマにおいては稀であった。

ゲルマン諸部族において鶏がどのように扱われたかはわずかな記録から探る他ない。エッダ『巫女の予言』は神々と巨人との戦を語り、神々により支えられた世界秩序の崩壊と新しい世界の出現を予言する。この戦で三羽の雄鶏——赤い雄鶏フィアラルは巨人たちを戦場へと召集し、黄金の鶏冠のグリーンカンビはオーディン麾下のヴァルハラに戦士たちを目覚めさせ、地下の国ヘルの館では煤赤い雄鶏が時を告げる。<sup>(39)</sup> 三羽の雄鶏はその鳴声によ

り死者を目覚めさせ、戦場へと駆立てるのみならず、前に迫った神々の黄昏及びその後にやってくる新しい世界秩序の夜明を告げる幾重かの意味を帯びるのである。

因に、異教の没落とキリスト教倫理による世界支配の始まりを示唆するやに思われる、西暦千年前後のこの予言の書の思想的背景に、ペルシアの二元論的宗教思想、特に四世紀以降にペルシア帝国から広まったマニ教の何らかの影響、あるいはインド・ゲルマン共通期以来時を経て伝えられ、温存された、ペルシア、ゲルマン共通の終末論思想を見ることができるといえる。<sup>(40)</sup>

鶏のゲルマン諸部族への渡来経路との関係は不明であるにしても、この動物に対するイメージが両民族間に共有されたものであったかもしれないのである。

世界樹ユグドラシル、あるいはミームメイズは天上と黄泉とを結び、北欧の世界全てを覆い、また日々その木蔭を神々の裁きの場に提供する。その梢には黄金の雄鶏ヴィーゾフニルが驚、鷹と共に油断なく周囲に目を光らせ、敵の襲来を神々に告る役割を負う。<sup>(41)</sup> 北欧神話においては鶏はこうして眠れる者を目覚めさせ、また四囲を見廻す見張として登場する。

エッダに多彩な鶏が登場するように、その色彩が象徴的な役割を決定することがある。赤い雄鶏は犠牲として

好まれる<sup>(42)</sup>。黎明に最初に気付き、告げることから雄鶏は夜明の光と燃える火の象徴として崇められた——インドで火神に捧げられたことは前述した。——特に赤い雄鶏は揺めく炎を意味する<sup>(43)</sup>。デンマークの諺によれば屋根の上での赤い雄鶏の声は、屋根を舐める炎の音に当てられる<sup>(44)</sup>。ハンガリー人が聖ガレン修道院に侵入した際、破風上に置かれた赤い雄鶏を、火を支配する土着の神と思ひ、恐れてここを立退いた、とされる<sup>(45)</sup>。またドイツの言いまわしでも放火を、赤い鶏で表わす。一説によると、盗賊が雄鶏を代赭石<sup>イグナル</sup>で描いて仲間内の放火の合図としたことに由来する、という<sup>(46)</sup>。黒い雄鶏は悪魔、悪霊の動物であり、呪われた魂の具現である。魂を賭した契約書には、悪魔の帽子に飾られていた黒い鶏の羽で署名がなされる。鶏は後述するようにキリストとも関連の深い動物とされ、白い雄鶏に騎るキリスト像も描かれる。その對比としても悪魔と黒い雄鶏との結び付きが強調される。俗信において鶏を地下の存在と関連づけることも皆無とは言えないが、悪魔との結びつきはむしろその色彩によって生じたイメージに依存するものと思われる。同様のことが白い鶏にも指摘されよう。それは幸運を齎し、黒魔術から家を守り、鼠を追払い、乳を吸いに来る蛇から牛を守るのである<sup>(47)</sup>。

特に民間において鶏に幾つもの俗信的役割が賦与され、その多くは現在に到る迄その名残を残す。最も多くは、その時を作る声及び举措による天候の予告、飼主の死や来客の予言である。豊稔祈願の為の犠牲動物としては、フレイザー<sup>(48)</sup>の述べるように雄鶏は穀物霊として収穫時及びその後の祝祭に、更に婚礼時には多産の儀式にも重要である。好天を祈る際にも犠牲にされることがある。民間医療ではその血液、特に鶏冠が用いられ、尾羽あるいは胃中の結石はそれを所有する者の願望を叶える魔力を持つ<sup>(49)</sup>。

ヨーロッパ導入期以来の様々な鶏像を見て来た。ベルシア伝来の宗教的要素も含め、これらはいずれも人々が鶏を如何に扱い、利用して来たかを示すひとつの歴史でもある。これらのうち最も古く且つ現在に到る迄有力であるのは、夜明を告げる雄鶏の鳴声であろう。それはブリニウスの所謂「ローマの夜警<sup>(50)</sup>」として人々を目覚めさせ、仕事へと駆立てる時計の役割を果すのみならず、夜明を齎す太陽との関連で、闇の世界に徘徊する悪霊を追い祓うとの敷衍的解釈から、アポトローペイックな動物と見做される。民間医療としての利用はここにあると思われる。上との関連から次には、断えず四周を見回し、黎明のみならず炎を発見するところから、——特に火の色

と相俟って赤い雄鶏は——火災を告げる、あるいは逆にそれを惹起す役割を果す。第三に、その举措振舞から、古くは政治的、軍事的に、後には民間で重要視されたのが、日常に生起する出来事の予言者、特に農民の生活との関連では天候の予報者としてのそれである。旗と同様、鶏が一般に風見として用いられたについては、この天候の予報者としての意味が大きいのではないであろうか。

私たちの当初の疑問に戻ろう。雄鶏は何故教会の尖塔に据えられたのか。上述の、雄鶏に賦与された数々の象徴的役割が影響したであろうことは完全には否定し得ない。何故なら、キリスト教に支配された中世の世界においては、ゲルマンの神々さえ人々を脅す闇の世界にのみ存在し得たのであり、そのような異教の神々の唯一支配権の及んだ世界に終焉を告げる役割も、天候を予知する風見のそれと共に、雄鶏の基本的な意味付けを果しているものと推測されるからである。ブレシアの司教はこれを教会の尖塔に置くに当り以上の、いわゆる世俗的解釈に何らかのキリスト教的意義を付し、補強したものである。

ではキリスト教では雄鶏をどう扱ったのか。旧約聖書にはこれに関する記述は皆無とされる一方、原典の解釈

次第では何箇所かに言及されるとも言われる。中世全般を通じ、全ての西方教会で用いられたのはウルガタ聖書であり、その「ヨブ記」に雄鶏は既に神により靈性を賦与された動物として扱われ<sup>(51)</sup>、ペルシア以来の、日の出を予知する特性を暗示する<sup>(52)</sup>。この言及は更に新約聖書に反映し<sup>(53)</sup>、常に油断なく周囲を見回す周到さを示すとされる。聖書のこのような記述が個々に中世のキリスト教会に於て独り立ちし、多様な解釈を引き出す例は多く、たとえば大教皇グレゴリウスは雄鶏を説教者になぞらえる。雄鶏がその鳴声をもってするように、説教者は現世の光の中で、言葉により来るべき光を告げようと努めるからである<sup>(54)</sup>。

聖書において最も注目すべき雄鶏は、ペトロによるキリスト否認の場に登場する<sup>(55)</sup>。弟子たちとの最後の晚餐を後えたキリストは、オリヴァ山に登りペトロの離反を予告する。今夜、鶏が鳴く前にペトロが三度キリストを知らぬと公言するであろう、というのである。その夜キリスト逮捕の場に居合わせ、最高法院<sup>ヤン・ドロン</sup>の中庭で裁きを秘かに見守っていたペトロは、女中等にキリストとの関係を見咎められ、三度に渡ってそれを否認する。その直後に雄鶏が鳴き、ペトロはキリストの予告を想い出し、また自分の命を賭してもキリストに従うとの約束をここで破

ったことを後悔し、外に出て激しく泣く。新約聖書中、最も感動的な場面である。前段のキリストの予告同様、この場面も幾多の敷衍的解釈を生み出した。とはいっても、その根底には常に、今また信仰につまづき、キリスト否認の罪を犯したペトロに対し、キリストの教えの真理に目覚め、改めて信仰に立戻すことを促す役割をこの場面での雄鶏が果たした、との理解が潜んでいる。その故に、初期キリスト教詩人ブルデンティウスが

雄鶏の啼くのを聞いた時、

彼は正しい人にされ、神に背くことをやめた<sup>(57)</sup>

とうたように、ペトロはキリスト復活の最初の証人となり、立直ることになるのである。<sup>(58)</sup>この場面はその意味を拡大され、人々の、信仰への促しと敷衍解釈されることになる。即ち先に述べた鐘に与えられたと同じ「信仰への促し」の、より深い意味付けを雄鶏はキリストの予告により賦与されるわけで、教会の塔に鐘と同様に設置される理由もここにあるものと考えられよう。しかし、キリスト教の象徴的表現及び解釈はここに留まらないことを私達は知らなければならぬ。ブルデンティウスを初め、聖書外の解釈がペトロの雄鶏を、朝を告げるものとしての特性と結びつけているのである。ブルデンティウスによれば、雄鶏は夜明を告げることにより、「夜の闇

をこれ幸と徘徊する悪霊共<sup>(59)</sup>」を四散させる。ペトロが否認の罪という闇の世界から真理へと目覚めたように、我々、罪深きが故に死に譬えられる眠りに耽る人間にとって、雄鶏の声はキリストの呼び掛けとなつて、罪の終焉を示唆する。

一日を先触れする鳥は

夜明の近いことを予告する

今 私達の魂を目覚めさせるキリストは 私達に 生きよ と呼び掛けたもう<sup>(61)</sup>

一方、雄鶏の声はまた、キリストの復活を告げるもの、とも考えられた。安息日が終り、三人の女たちが夜明と共にキリストの墓に行った時は既にキリストの復活直後であったとの福音書の記述は<sup>(62)</sup>

このこと(ペトロの目覚め)があつてから私たちは皆信ずるようになった キリストが死から蘇えられたのは 雄鶏が誇らかに時を告げたあの眠りの時間においてであつた<sup>(63)</sup>

と解釈される。闇の力に対する雄鶏の勝利はそのまま、死に対するキリストの勝利、即ち復活と説かれる。事実、カタコムベにも復活のシンボルとの銘を添えた雄鶏が当然のことのように描かれたのである。<sup>(64)</sup>

ここから明らかのように、初期キリスト教時代以降、

雄鶏を救世主キリストのシンボルとして把えていた形跡が多く認められる。また聖職者たちによりその理由づけもなされた。幾つかの例を挙げると、四世紀アフリカの司教フォルトゥナティアンは、犠牲にされる雄鶏コケツと磔刑に処されたキリストとを、共に血を流すことにより完遂される、救済をもたらすものとし、キリストの「犠牲」が教会の聖化を目的としたものであるが故に、雌鶏は教会及びその信徒と解すべきである、とした。<sup>(65)</sup>同じ頃、アレクサンドリアの釈義家、盲目のディデュモスは、雄鶏を主、即ち人々の心に言葉の種を撒きつけ、光明を告知するものの象徴とし、人々に、贖罪を通じて近づける終末の時に備えよ、と呼び掛ける存在と理解した。同時に彼は旧約聖書「箴言」の書にも雄鶏を見出し、雌鶏に囲まれ、尾を立てて堂々と歩くこの鳥を、常に教会の中心に在すキリストの予形と見たのである。<sup>(67)</sup>

雄鶏をキリストの象徴とする見方は四、五世紀においては稀ではなかった。初期キリスト教期の聖書釈義家たちがその主張の根拠としたのは、古代に由来する碧玉ジャスパーの指輪に彫られた小舟の図と言われる。<sup>(68)</sup>船先を棕櫚で飾った小舟には雄鶏が乗っており、これが福音書、ガリラヤ湖上の嵐の場面に擬せられたのである。キリストと弟子たちとを乗せた小舟を突風が襲う。不安に駆られ

た弟子たちが、艫に枕するキリストを起すと、キリストは湖水に静まるよう命ずる。釈義家たちはこの場面から、荒れる湖を、現世のあらゆる危険や迫害、小舟を、そのような現世の嵐に耐えて航行する教会と解し、弟子たち同様、信徒たちの祈こそ主を目覚めさせることを可能にする、と説く。

フォルトゥナティアン、ディデュモス等のみならず、ミラノの司教聖アムブロシウス、ボワチエの教会博士聖ヒラリウスなども彼らの解釈を残すが、これらはいずれも雄鶏を靈性を備えたものとしている。<sup>(70)</sup>正典に則ったこれらの解釈とは別に、外典偽典あるいは聖者伝に由来する雄鶏の奇蹟にまつわる伝承——最後の晩餐に供された、丸焼きあるいは茹でられた鶏の蘇生がキリストの復活と結びつけられる——も語り伝えられ、ここでも雄鶏はキリストに擬せられるのである。<sup>(71)</sup>

ブレシアの司教の時代、九世紀頃のキリスト教界は正典のみならず外典などの雄鶏解釈を恐らくは承知していたものと思われる。しかも前述したように、修道院内でミサの時を告げ、後に塔に吊されて聖堂区セインツの信徒を信仰へと促し驅る役割を与えられた鐘同様のあるいはそれをはるかに超越した意味を雄鶏は古くから認められていたのである——ペトロのキリスト否認の解釈によって。し

かも釈義家たちによれば、雄鶏はキリストのシンボルであり、これはキリストの磔刑により十字架に賦与された象徴でもあった。雄鶏はこれらの象徴性に基き、あるいはこれに民間の俗信、特に天候を予知するとされて風見となったことと重ね合されて、教会の尖塔で翔くことになつたのではないであらうか。

因に雄鶏が他ならぬ塔の上という高所に飾られた理由についても諸説が伝えられる。西暦二世紀に北アフリカのローマの属州にあつたフラウィウス一族の靈廟には、風見として鶏が据えられた、と伝えられる<sup>(72)</sup>。それが宗教的建築物であるだけに注目に値するものの、単なる風見に過ぎないのか、あるいは何らかの象徴的意味を負つていたのかは不明である。鶏の闘争力に表わされる生のシンボルとして靈廟上に据えられたことも考えられるが。

またペトロによるキリスト否認の場面は、それが使徒であり、後に聖人と言われる者の、死を恐れての行為というこの上なく人間的なそれであるだけに、四世紀半ばのブレミアの聖遺物匣の彫刻を初め<sup>(73)</sup>、九世紀を頂点に好んで図像化されるが、その多くは雄鶏は柱頭上に描かれる。しかしこれも既に古代において好まれた図像の模倣なのであり、その意味は必ずしも明らかにされないまま、たとえば古くはパンアテナイア祭の賞となつた

両把手付きの壺に描かれていたのである<sup>(74)</sup>。更にこのような先例に頼る迄もなく、ユグドラシルの梢の雄鶏ウィーゾフニルからグリム童話第二十七話「ブレーメンの音楽隊<sup>(75)</sup>」の世俗の老鶏に到る迄、高所に坐して油断することなく常に四囲を見回し、時を告げる雄鶏のイメージは、古くから人々の想像力を掻き立てるものを持っていたのではないであらうか。

## 注

- 1 Grimm Myth. : Bd. 2, S. 636. 尚、引用書略名は、小論「旗と十字架」(『文藝研究』59号)注に準じた。
- 2 Lex. chr. Ikon. : 〈Hahn〉II B の頁。但、上掲書は以下からの引用である。
- 3 Dictionnaire d'Archéologie chrétienne et de Liturgie. hrsg. v. P. Cabrol-H. Leclercq. 15 Bde. 1924-53 Paris 更に, Realencyclopädie der christlichen Altertümer I 1880 Freiburg i. Br. S. 634 にも同様の記述があるという。
- 4 Leopold Kretzenbacher : Der Hahn auf dem Kirchthurm -Sinnzeichen, Bibelexegese und Legende in : Rheinisches Jahrbuch für Volkskunde 9. Jg. 1958 Bonn (以下 Kretzenbacher と略す) S. 198. また、ヨハン・ベックマン『西洋聖物起源』全3巻、特許庁内技術史研究会訳第3巻〈風見〉の項。特にその注18参照。
- 4 Lexikon für Theologie und Kirche hrsg. v. K. Rahner u. J. Höfer 10 Bde., 1 Registerbd. u. 3

- Konzilsbde. 1986 (unveränderte Sonderausgabe) Freiburg i. Br. (以下 **Lex. Th. K.** と略す): <Turm> の項。
- 5 「創世記」11, 1-9。バベルの塔の図像化については, Mohr Symbol: <Turm> の項参照。塔の建設により「全地に散らされた」人々の, 五旬祭における再会時の言葉の奇蹟(「使徒言行録」2, 4-12)及び天の国での集合(「ヨハネの黙示録」7, 9及び14, 6, 更に17, 15)との対置で描かれる。11世紀以降17世紀迄。「雅歌」7, 5の象牙の塔は, 花嫁の美しさの形象であり, 象牙の神聖さと非のうちどころのないところから貞潔を表わし, 「雅歌」4, 4ダヴィデの塔には, マリアの美点を寓意的に表わす幾多の盾が掛けられている, とされる。尚中世の建築用語では, 教会の中心となる建築物は塔とみなされ, 聖母教会においてはこれがダヴィデの塔及びマリアのシンボルとしての象牙の塔とされる。更に「詩篇」61, 4「箴言」18, 10では神が塔に譬えられる。Lex. Chr. Ikon.: <Turm> I及び<Kirche, Kirchenbau> II A2bの項参照。また新約聖書「ルカによる福音書」14, 28-30の塔建設の譬語, 外典「ヘルマスの牧者」第三のまぼろし及び第九のたとえなし参照。「ヘルマスの牧者」において, 塔は夫々理想とされる教会及び地上の教会を象徴, そこに入ることを許されるための救済の条件が暗示される。『聖書の世界』別巻4参照。
- 6 Lex. chr. Ikon.: <Turm> II Bの項。
- 7 たとえば Centula (779年開基), Fuldaにある Ratgerのバシリカ(814年開基)の塔など。Lex. Th. K.: <Turm> の項。
- 8 Lex. chr. Ikon.: <Kirche, Kirchenbau> II A3cの項。市(城)壁上の天使については, 「ヨハネの黙示録」21, 129。
- 9 Lex. chr. Ikon.: <Kirche, Kirchenbau> II A3cの項参照。
- 10 RGG: <Glocken> I 1の項。
- 11 「出エジプト記」28, 35。
- 12 RGG: <Glocken> I 2の項。
- 13 Mohr Symbol: <Glocke> の項。
- 14 たとえば「コリンの信徒への手紙一」第13章における使徒パウロの言葉。
- 15 阿部謹也『中世の星の下で』影書房<鐘の音に結ばれた世界>の項参照。引用は307ページ。
- 16 RGG: <Glocken> I 1及びI 2の項。
- 17 一般的に鐘の象徴性は, その音即ち広い空間に音を響かせるという点にあると思われる。Mohr Symbol <Glocke> の項参照。宗教も都市当局もこの象徴性を大いに利用したのである。鐘が大型化することは, 両者にとってそれだけ有利になるはずである。
- 18 Mohr Symbol: <Turm>の項。また RGG: <Kirchenbau> III 1, 特に Spalte 1358 参照のこと。
- 19 Vgl. Herder Symbol: <Glocke> の項。
- 20 Lex. chr. Ikon.: <Turm> II Aの項。
- 21 Reallexikon für Antike und Christentum — Sachwörterbuch zur Auseinandersetzung des Christentums mit der Antiken Welt — hrsg. v. Theodor Klauser u. a. 1950 — Stuttgart (以下 **Reallex. Ant. Chr.** と略す): <Hahn> Gの項。vgl. Lex. z. Bibel: <Hahn> の項。
- 22 Trübner Deutsches Wörterbuch hrsg. v. W. Mitzka u. a. 8Bde. 1939-57 Berlin (以下 **Trübner** と略す):

- 〈Hahn, Henne, Huhn〉の項, 特に Bd. 3 S. 281.
- 23 Der Große Duden Bd. 7 Etymologie 1963 Mannheim: 〈Hahn〉の項及び Trübner: 〈Hahn, Henne, Huhn〉の項参照。雄鶏 (ドイツ語) Hahn なる語はゲルマン共通語 (*mhd. u. schwed. hane; ahd. hano; got. u. altengl. hana* など) で, 印欧語根 kan- (=singen, klingen, tönen) の名詞形。vgl. *lat. canere* (=singen), *gr. ēi-kanós* (Hahn)。いずれもその時を作る声に注目していたと思われる。尚, 『文芸研究』59号の拙稿冒頭に掲げたクレレ伝説 „die schöne Jungfer Kläre“ のフランス名 „Chantecler“ (=chanter clair) もやはり鳴声に結びつく。
- 24 黒柳恒男『ベルシアの神話』泰流社25ページ参照。
- 25 Awesta Vendidad XVIII Encyclopaedia of Religion and Ethics edited by James Hastings 12 vols. 1908-12 New York u. Edinburgh (以下 **Encyclo. Rel. Eth.** と略す): 〈cock〉の項, 特に vol. III p. 694 参照。尚, 辻直一郎編『ヴェーダ アヴェスター』世界古典文学全集 筑摩書房の解説も参照のこと。
- 26 Encyclo. Rel. Eth.: 〈cock〉の項, 特に vol. III p. 696 参照。
- 27 たとえば Jacob u. Wilhelm Grimm: Deutsche Sagen Nr. 189 „Die Teufelsmauer“, Nr. 184 „Die Teufelsmühle“。また Nr. 186 „Die Sachsenhäuser Brücke zu Frankfurt,“ もこれに類するか。わが国の「地藏浄土」など。関敬吾他『日本昔話大成』角川書店第4巻及び稲田浩二他『日本昔話事典』弘文堂「にわとり」の項参照。
- 28 Encyclo. Rel. Eth.: 〈cock〉の項, 特に vol. III p. 694 参照。
- 29 同上。また HDA: 〈Hahn〉1 の項参照。
- 30 ベトロニウス『サテュリコン』第二部「トリマルキオの饗宴」岩崎良三訳 筑摩世界文学大系64 316ページ参照。
- 31 『イソップ寓話集』第209話 山本光雄訳 岩波文庫。だがローマでは雄鶏の, 鶏冠を立てた誇らかな歩き方, 時折空を見上げて尾を逆立てる仕事にライオンが恐れる, という。『プリニウスの博物誌』: [48] 中野定雄他訳 雄山閣 (以下『プリニウス』と記す): 第1巻443ページ。尚, リビアにおいては旅行者はライオンから身を守るべく雄鶏を携行した, とも。Reallex. Ant. Chr.: 〈Hahn〉C I の項。
- 32 Encyclo. Rel. Eth.: 〈cock〉の項, 特に p. 695 参照。
- 33 同上。尚, このようなイメージは前述の鐘にも与えられていた。また後に述べる所謂ペトロのキリスト否認の折の雄鶏の意味にも結びつくか。
- 34 アISKYUROS『エウメニデス』v. 861f. 呉茂一訳 (『悲しみの女神たち』) 白水社ギリシア悲劇全集 第1巻。
- 35 スエトニウス『ローマ皇帝伝』第3巻「ティベリウス」及び第7巻「ウィテリウス」の項。国原吉之助訳 岩波文庫。
- 36 アISKYUROS『アガメムノン』v. 1671 呉茂一訳 白水社 ギリシア悲劇全集 第1巻。
- 37 アリストファネス『鳥』v. 483ff. 呉茂一訳 白水社 ギリシア喜劇全集 第1巻。
- 38 プリニウスは雄鶏について, 他の特性と同時に「肥育」の項も設けている。『プリニウス』[50] 第1巻444ページ。またルキアノスは11人の神々を「年をとって鼻

- たらしの」たった一羽の雄鶏でもてなした男について記す。ルキアノス『悲劇役者ゼウス』高津春繁訳 筑摩世界文学大系64 153ページ)。ペトロニウスも彼の主人公たちに、洗練された鶏料理について語らせている。ペトロニウス『サテュリコン』292 及び 312 ページ。しかしブリタンニアの部族がこれを食用としなかったことが伝えられるなど、民族、部族により様々であったらしい。カエサル『ガリア戦記』V 12 近山金次訳 岩波文庫。
- 39 「巫女の予言」v. 42f. 『エッダー古代北欧歌謡集一』谷口幸男訳 新潮社 13ページ。
- 40 フォルケ・ストレム『古代北欧の宗教と神話』菅原邦城訳 人文書院 259ページ参照。
- 41 A. エリオット, M. エリアーデ他『神話—人類の夢と真実—』大林太良, 吉田敦彦訳 講談社 108ページ参照。
- 42 Grimm Myth.: Bd. 2, S. 635.
- 43 同上。
- 44 尚, Lutz Röhrich: Lexikon der sprichwörterlichen Redensarten 2Bde. 1978<sup>9</sup> Freiburg i. Br. 以下 **Röhrich** と略す): <Hahn> の項, 特に Bd. 1 S. 370f. 参照のこと。
- 45 HDA: <Hahn> 6 の項及び Grimm Myth. S. 636.
- 46 „einem den roten Hahn aufs Dach setzen“ (ある人の家の屋根に赤い雄鶏を置く) は, 「ある人の家に放火する」の意味である。Röhrich: <Hahn> の項, 特に 370f. ページ。ヴェルツブルクの伝承として, ヴィルヘルム・フォン・グルムバハがこの町を急襲した際, 兵たちはこのドミニコ小路のある建物に赤い雄鶏をのせ, 火を放った。雄鶏が鳴きながら次々と隣家

の屋根に飛び移ったので, 火は多くの家屋に広がった。後に当の建物は再建され, 「赤鶏亭」と命名されたという。

- 47 HDA: <Hahn> 6 の項。
- 48 フレイザー『金枝篇』(三) 第48章 3 永橋卓介訳 岩波文庫 第3巻 249 ページ参照。この意味での雄鶏の犠牲は Hahnenschlagen, Kirchweihfest における Kirmesbaum 除去の際の雄鶏の頭の埋葬など, 多彩である。
- 49 HDA: <Hahn> 1-4 及び <Hahnenstein> の各項。
- 50 『プリニウス』: [46] 第1巻 443ページ
- 51 「ヨブ記」38, 36, vgl.: „Wer verlieh dem Ibis Weisheit, wer gab Einsicht dem Hahn?“ (Neue Jerusalem Bibel 1980 Stuttgart ウルガタ他に基づく共同訳聖書) 「誰が鴉に知恵を授け 誰が雄鶏に分別を与えたのか」 (新共同訳聖書) „Wer gibt die Weisheit in das Verborgene? Wer gibt verständige Gedanken?“ (1955 Nach der deutschen Übersetzung D. M. Luthers) 「雲に知恵を置き, 霧に悟りを与えたのはだれか」 (1955 小形聖書口語)
- 52 Lex. chr. Ikon.: <Hahn> IA の項。
- 53 「マルコによる福音書」13, 35。
- 54 Manfred Lurker: Wörterbuch biblischer Bilder und Symbole 1987<sup>8</sup> München: <Hahn> の項。

- 55 ベトロの否認の場面は四福音書に夫々見出される。「マタイによる福音書」26, 69-75; 「ヨハネによる福音書」18, 17-27 など。
- 56 これも四福音書に見られる。「マタイによる福音書」26, 34-35 など。尚、鶏鳴は『プリニウス』[49]を待つ迄もなく時計の役割を想起させる。特に「マルコによる福音書」14, 72 では雄鶏を2度にわたって鳴かせ、夜明と共に結審する裁きの時間的経過を示している。
- 57 Aurelius Prudentius Clemens: Liber Cathemerinon (I) Hymnus ad Galli Cantum (以下 **Prud. cath.** と略す): V. 63f. 尚、日本語訳としては、ブルデンティウス『日々の賛歌・靈魂をめぐる戦い』家入敏光訳「カテメリノン 日々の賛歌 第一歌 鶏鳴時の賛歌」がある。
- 58 「ルカによる福音書」24, 34 及び 22, 32; 「コリントの信徒への手紙一」15, 5。
- 59 Prud. cath. v. 37f.
- 60 Prud. cath. v. 25f.
- 61 Prud. cath. v. 1-4.
- 62 「マルコによる福音書」16, 2 他。
- 63 Prud. cath. v. 65-68.
- 64 Lex. Th. K.: 〈Hahn〉の項。
- 65 Kretzenbacher S. 199 参照。
- 66 「箴言」30, 31 小形聖書(口語)参照。この一節は古来多様な解釈が行われ、新共同訳、また前出 Neue Jerusalem Bibel では雄鶏ではない。
- 67 Kretzenbacher S. 198.
- 68 Kretzenbacher S. 199. この解釈は釈義家たちにより強力に支持されたという。

- 69 「マタイによる福音書」8, 23-27 など共観3福音書。  
70 Kretzenbacher S. 200.
- 71 Pseudo-Bartholomäus-Evangelium (5, 6 世紀のギリシア語の原典に基づくものと思われる)に由来するコプト語の伝承として、最後の晩餐のテーブルに置かれた鶏の丸焼を指し、キリストは、自分はこの鶏のように死にそして蘇えるであろう、と言い、羽ばたくように命じるとそのとうりになる。また14世紀の絵入英語事典では、ユダは実母にキリストに対する裏切りを告げると、ひどく非難される。それに立腹したユダは、かまどの上の鍋で茹られている鶏を指し示し、この鶏と同様、キリストも磔刑後復活することはあるまい、という。すると鶏は鍋の中から舞上り、屋根の上でキリストの復活を声高く予告する。またベトロのキリスト否認の際に鳴く雄鶏がこれである、ともいう。Kretzenbacher S. 204f. 尚、『黄金伝説』第2巻 94 「使徒聖大ヤコブ」ではこの雄鶏の奇蹟は11世紀の、聖ヤコブの墓所へ巡礼するドイツ人の父子をめぐる物語において生じる。
- 72 Kretzenbacher S. 197.
- 73 Schiller Ikon.: Bd. 2 S. 69ff. 及び Abb. 10, 163, 196, 198-200, 206, 658-660.
- 74 Lex. Th. K.: 〈Hahn〉の項。
- 75 グリム兄弟のこの昔話には雄鶏の2つの特性が巧みに織り込まれている。森の梢に仮の雫を求めた雄鶏は四囲を見廻して灯火を発見する。更に最後には逃走する盗賊に向い屋根の上から「その悪党をこっちへ連れて来い」と叫ぶ裁判官として。グリム兄弟自身の注に、ドイツ北西部パーダーボルンでの採集と記されるが、これには幾つかの文学上の先蹤——ハンス・ザックス

など——と数多くの類話がある。ヨーロッパに伝わる類話に限ればその大部分に共通して活躍する唯一とも言える動物が雄鶏であり、しかもいずれの場合も他の旅仲間とは異り、その鳴声によって屋根の上から最後の裁きを下す役割を負う。

J. Bolte u. G. Polívka: Anmerkungen zu den Kinder-u. Hausmärchen der Brüder Grimm 5Bde. in 4Bdn. 1982 (3. Nachdruckauflage) Hildesheim Bd. 1 S. 237-259 参照。